

機関番号：12603

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720093

研究課題名 (和文) ウォライタ語 (エチオピア) 及びその周辺言語の記述的研究

研究課題名 (英文) A descriptive study of Wolaytta (Ethiopia) and its neighboring languages

研究代表者

若狭 基道 (WAKASA MOTOMICHI)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 研究員

研究者番号：30436670

研究成果の概要 (和文) : エチオピア南西部で話されているウォライタ語の引用構文の性格を明らかにした。多くの語彙を集めるため、口承文芸である謎々を採集、分析した。日常使われない語彙や表現が多々観察された。ウォライタの歴史に関する口頭テキストの校訂・確認作業を行った。その一方でウォライタ語と隣接している言語であるカンバタ語の基礎的な語彙の調査、基礎的な文法事項の調査、簡単なテキスト採集・分析を行い、基礎的な言語資料を収集した。

研究成果の概要 (英文) : I elucidated the character of the quotation structure in Wolaytta, spoken in the south-western part of Ethiopia. To collect many words, I collected and analyzed Wolaytta riddles, which are oral literature. Many unusual words and expressions are observed in them. I edited and checked an oral text about Wolaytta history. In addition, I conducted basic lexical and grammatical investigations on the Kambata language, which is a neighboring language of Wolaytta. I also collected and analyzed short texts of the language. In other words, I collected basic materials of the language.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,700,000	540,000	3,240,000

研究分野：言語学 (アフロアジア諸語)

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：エチオピア、ウォライタ語、カンバタ語、アフロアジア諸語

1. 研究開始当初の背景

ウォライタ語の文法に関しては相当詳細な事実が判明していた。先行研究も幾つか存在していたし、本研究代表者自身も 2007 年までに何度も現地調査を行い、相当な資料を収集していた。その成果は 2007 年に東京大学に提出された本研究代表者自身の博士論文「A descriptive study of the modern Wolaytta language (邦題：現代ウォライタ語の記述的研究)」に結実している。これは、総ページ数が 1000 ページを越えるもので、

あらゆる領域に亘って考察したものであった。(とは言え、完全であるという訳では勿論なく、個々の現象に関して更なる調査・研究が必要であるのは言を俟たない)。

しかし、語彙面に関しては情報・分析、共に不十分であった。即ち、本研究開始当初、相当の語彙を収集していたつもりであったが、調査の度に新しい語彙が見つかった。このことからウォライタ語は総語彙数が相当多いのではないかと、例えば文学ジャンルごとに特殊・固有な単語が多く存在しているの

ではないか、あるいはそうしたもののの中に古語が混入しているのではないかと、といったことが予想されていたが、実際のところ、語彙の全体がどのような規模になるのか、想像もついていなかった。また、ある語から別のある語が派生されることがウォライタ語でも見られるが、完全に規則的で予想可能という訳ではない。従って、各形成手法がどの程度生産的なのか、どの程度予測可能なのか、不規則で個別的なものはどのくらいあるのか、その中でもある程度の規則化が可能なものはどのくらいあるのか、といった問題が残っていた。

またウォライタ語は、カンバタ語、ハディヤ語、オロモ語等、周辺諸言語との接触により様々な影響を受けていると予想されていた。また、ウォライタゾーンより南や西で話されているゴファ語、ガモ語、ダウロ語、マロ語等はウォライタ語とは系統的に極めて近い関係にあると予想されていた。従って、これらの言語との比較・対照を通じて、ウォライタ語の過去の姿、及びその祖先としての言語の姿を再建したり、ウォライタ族と周辺諸民族との交渉の歴史を明らかにしたりすることも可能であると予想されていた。だが、それらウォライタ語の周辺諸言語に関する正確な情報は極めて限られおり、乏しいものであった。

2. 研究の目的

そこで、研究の目的の1つはウォライタ語の語彙研究を充実させることであった。これには、先に述べたように、語の派生法の全体像を明らかにすることと、普段は耳にしにくいような語彙、表現の採集・分析が含まれる。この後者の目的のためには、日常の話し言葉だけではなく、口承文学作品を積極的に採集することや、過去に採集したウォライタの歴史に関して語られた口頭テキストを精密に分析することが要求される。この過程で、語彙研究とは直接には関係のない現象が明らかにされることも当然考えられる。

研究目的のもう1つは、周辺言語を1つ選び、その資料を初めから集めることであった。即ち、基礎語彙 2000 語程度の収集、基礎的且つ網羅的な文法調査の実施、及び簡単なテキストの採集と分析である。

3. 研究の方法

現地でのフィールドワークを中心とした。ウォライタ語に関しては、既に何度もウォライタ語使用地域に足を運んでいるので、今回も同じ場所を訪ねて調査の拠点とした。そこでウォライタ語のネイティブ話者との面接調査を行った。具体的には、こちらの準備した質問に答えて貰ったり、こちらの条件に応じて作文して貰ったり、あるいは自由にそ

の言語で語って貰ったりして資料を収集・録音した後、分析を施した。この過程には、過去に集めた資料の再分析、確認も当然含まれる。

また、現地ではウォライタ語が様々な場面で活発に使われているので、それらを参与観察したり、多くの話者にさりげなくアンケート調査をしたりすることも行った。単に言語の資料を集めるだけでなく、言語政策に関する情報まで含めて収集した。

ウォライタ語以外の言語に関しては、結局カンバタ語を選んだが、これも面接調査により資料を収集した。但し、カンバタ語の話されている地域ではなく、本研究代表者がいつも滞在しているウォライタの町で、ウォライタに在住・就労しているカンバタ語のネイティブ話者の協力のもとに行った。勿論、カンバタ語使用地域で調査を行うのが本筋であるが、いきなり現地入りしても限られた滞在期間の中でそもそも調査を始められるのか見通しも立っておらず、予備的な知識や情報を慣れ親しんだ場所で集めてから現地入りした方が効率的であること、ウォライタ語の調査と並行して行いたかったこと等を考慮して、ウォライタの地で行った。尚、この過程でウォライタに複数のカンバタ語話者とかなり簡単に出会えることを確認出来たのも、多言語社会の実情を把握する上で大きな収穫であった。

その他、アジスアベバ大学の Institute of Ethiopian studies (エチオピア学研究所) の図書館で、少量ではあり、時間の関係もあったが、他では先ず閲覧出来ないような文献に目を通すことも行った。

4. 研究成果

(1) ウォライタ語の引用構文の文法論的分析に関して学会発表・研究会発表を行い、論文にまとめた(現在審査中である)。

一般にこの言語では直接話法が好まれるとされているが、引用部末尾に現れる動詞(及びそれに対応する主語)は元の発話と同じ人称、同じ活用形で現れるため、一見直接話法に見えてしまう例が多く見えてしまうものの、実際には間接話法が好まれていることを明らかにした。また、3人称の通常の代名詞と再帰代名詞の現れ方から判断して、引用部末の動詞は従属節を構成する動詞としての力を持っておらず、擬音語・擬声語に通じる所謂 **preverb** に近くなっていることを指摘した。換言すれば、ウォライタ語の引用部はその内部に従属節を含むことはあっても全体としては節として機能していないことを指摘した。「引用部は従属節をなす」とどの言語でも無条件・無自覚に認められて来たようであるが、この点に関して疑義を呈した、ということである。

(2) 伝統的な口承文芸である謎々を新たに採集・分析した。ここで言う謎々とは、日本やエチオピアでもアムハラ語文化圏で一般に考えられているものとはかなり異なり、問に対して韻を踏んだ文で答える、それも可能ならば内容的にも対応するもので答える、といった形式のものである。これらの採集を通じて、日常はまず聞かれない語彙や表現が採集出来たのは、今後の辞書編纂や文法研究にとって貴重な資料となる。

また、ウォライタ語では名付け等にも韻が重要な役割を果たしているが、言語の美的機能・詩的機能、他の言語には翻訳出来ない側面の価値を考える上でも重要な資料が得られた。

また、ウォライタの謎々には古語や古い形式を多用した、古くから伝わっているものが多いと推測されるが、比較的新しく創られたのではないかと考えられるものも見付かった。これらは内容的に偏りがあり、あまり人前で口に出来るものではないが、こうしたものが作られ続け、伝えられ続けているという事実は文学の社会的機能を考える上でも重要になってくるかと思われる。

その他、近年同じくエチオピアのアリ語にも同様の謎々が存在することが金沢大学の柘植洋一によって報告された。こうした謎々の起源と伝播がどのようなものであったのか、文学研究の観点からも極めて興味深い資料を得られたと言える。

(3) ウォライタの歴史に関して語られた口頭テキストの校訂作業を行った。これは現地のこの分野では著名な長老から採集したものであるが、語った本人からも直接不明点を確認することが出来た。

内容はウォライタの歴史に関するものであるが、随所に口承文芸やその中に見られる表現が見られ、語彙研究の面でも貴重な資料が得られた。文法研究のコーパスとしても当然活用出来よう。

言語学の観点からだけでなく、内容面でも貴重な伝承を多く含んでおり、歴史研究にも将来貢献出来るであろう。

まだまだやらなければならない作業は多く残っているが、現地の人々に公刊が最も切望されている資料でもあり、その整理分析が大幅に進んだことは、喜ばしいことであると言える。

(4) カンバタ語を最初から調査した。最初は基礎語彙を2000語ほど収集・録音した。次に、基礎的な文法事項を調査票に従って、一通り調査した。その後は、若干の口頭テキストを採集、分析するところまで進められた。即ち、本当に最低限度の資料が得られたということである。

この言語は実は参照文法が既に公にされてはいる。だが、ウォライタ語の様々な側面

を研究した者により、オモ諸語言語学や言語接触の観点から研究がされたことはない。その意味で、本調査は無駄な重複では決してなく、近年盛んな社会言語学の観点から重要な資料を提供し得る一次資料を収集出来たと言える。

実際に、両言語で語形の似ている言語のリストを作ってみると、その語尾の対応関係等から、何となくではあるが、接触の方向が見えて来る。このことは、ある研究会の場で報告したことがあるが、更に論証をしっかりとものにしていずれ公刊する予定である。

(5) 現地での言語使用の実態を実際に観察した。多言語使用地域であるウォライタで人々がどのように言葉を使っているのか、その自然な振る舞いから人為的な政策まで、直接観察・取材出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

若狭基道、「ウォライタポップス(エチオピア)に見られる記憶」、『民族紛争の背景に関する地政学的研究』、査読なし、Vol.12、2010年、pp179-186.

〔学会発表〕(計3件)

若狭基道、「ウォライタ語の関係節」、日本ナイル・エチオピア学会、2009年4月26日、総合地球環境学研究所

若狭基道、「ウォライタ語の「再帰代名詞」」、日本アフリカ学会、2008年5月24日、龍谷大学

若狭基道、「ウォライタ語の引用文と人称代名詞」、日本アフリカ学会、2007年5月26日、長崎ブリックホール

〔図書〕(計1件)

砂野稔幸・梶茂樹(編著)、三元社、『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』、2009年、pp281-308に、若狭基道が「数百万人の「マイノリティ」——ウォライタ(エチオピア)の場合——」を執筆。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若狭 基道 (WAKASA MOTOMICHI)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研

研究所 研究員

研究者番号 : 30436670